

第2調

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて、八調經の主日の讚頌三章、アナトリーの四章、月課經の三、或は四、或は六章を歌ふ。若し聖人の祭日ならば、光榮、月課經の、今も、調の第一の生神女讚詞。

主日の讚頌、第二調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。來りて、世の無き先に父より生れし神の言、童貞女マリヤより身を取りし者に伏拜せん。蓋彼は親ら望みし如く、十字架を忍びて、葬に付されたり、死より復活して、我迷へる人を救ひ給へり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我等を環らん。ハリストス吾が救世主は我等を罪する書券を十字架に釘うちて之を抹し、死の權を空しくし給へり。我等其三日目の復活に伏拜す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。我等は天使首と共にハリストスの復活を讚め歌はん。蓋彼は我等の靈の贖罪主及び救世主なり、且畏るべき光榮と勁き能力とを以て還來りて、其造りし世界を審判せん。

又讚頌、アナトリーの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が捧の聲を聴き納れん。天使は爾十字架に釘せられて葬られたる主宰を傳へて、女等に言へり、來りて、主の臥したる處を觀よ、蓋彼は言ひし如く復活せり、全能者なればなり。故に我等爾惟一不死の者に伏拜す。生命を賜ふハリストスよ、我等を憐み給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。爾の十字架にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて人類を照し給へり。故に我等爾に籲ぶ恩主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。主よ、死の門は畏懼に因りて爾の爲に啓け、地獄の門衛は爾を見て懼れたり、蓋爾は銅の門を破り、鐵の柱を折き、我等を幽闇と死の蔭より引き出し、我等の縛を截ち給へり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。救の歌を歌ひて、口を齋しくして籲ばん、皆來りて、主の家に伏拜して曰はん、

第二調 「スポタ」の大晩課 二六九

第二調 「スポタ」の大晩課 二七〇

木の上に釘せられて、死より復活し、父の懷に在す主よ、我等の罪を淨め給へ。

他の讚頌、至聖生神女に捧ぐ、月課經の讚頌の無き所に之を歌ふ。アモレイのパワエルの作。第六調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。倚頼なき者の堅固なる憑恃、罪に陥る者の拯救たる讚め歌はるるマリヤ、潔き生神女

よ、我が此の<sup>わ</sup> 祈<sup>こ</sup> を受けて、爾<sup>いのり</sup> の母たる<sup>う</sup> 祈<sup>なんじ</sup> 禱<sup>はは</sup> を以て我に生涯<sup>きとう</sup> 犯<sup>もつ</sup> しし諸罪<sup>われ</sup> の赦<sup>しょうがい</sup> を獲<sup>おか</sup> しめ給<sup>しよざい</sup> へ。女<sup>ゆるし</sup> 宰<sup>え</sup> よ、爾<sup>たま</sup> の大なる<sup>たま</sup> 憐<sup>たま</sup> に由りて、我を危難<sup>あわれみ</sup> 及び<sup>よ</sup> 將來<sup>われ</sup> の定罪<sup>きなん</sup> より救<sup>およ</sup> ひ給<sup>しょうらい</sup> へ。 <sup>ていざい</sup> <sup>すく</sup> <sup>たま</sup>

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

我が在世<sup>わ</sup> の日<sup>ざいせい</sup> は悪<sup>ひ</sup> し、悪<sup>あ</sup> しくして罪惡<sup>ざいあく</sup> に充<sup>きようあく</sup> つ、凶惡<sup>はなはだ</sup> なるサタナ甚<sup>われ</sup> しく我を擾<sup>みだ</sup> すに因<sup>よ</sup> る。神<sup>かみ</sup> の母<sup>かみ</sup> よ、爾<sup>われ</sup> 我を其害<sup>な</sup> より免<sup>な</sup> れしめ、至聖<sup>はなはだ</sup> なる者<sup>われ</sup> よ、爾<sup>みだ</sup> 我を其口<sup>よ</sup> より脱<sup>よ</sup> し給<sup>かみ</sup> へ、我<sup>よ</sup> 悉<sup>かみ</sup> くの憑<sup>よ</sup> 恃<sup>かみ</sup> を爾<sup>よ</sup> に負<sup>かみ</sup> せられたればなり。爾<sup>よ</sup> の熱切<sup>よ</sup> なる祈<sup>よ</sup> 禱<sup>よ</sup> を以て我を救<sup>よ</sup> ひ給<sup>よ</sup> へ。

句、蓋彼が我等に施す<sup>けだし</sup> 憐<sup>われ</sup> は大なり、主の眞實<sup>ほんじつ</sup> は永<sup>えい</sup> く存<sup>ぞん</sup> す。

耻<sup>は</sup> を得<sup>え</sup> ざる轉<sup>てん</sup> 達<sup>たつ</sup> 者<sup>しや</sup> よ、慶<sup>よろこ</sup> べ、至善<sup>しぜん</sup> なる生<sup>しやう</sup> 神<sup>しん</sup> 女<sup>じよ</sup> よ、慶<sup>よろこ</sup> べ、世界<sup>せかい</sup> の鑄<sup>きよ</sup> 潔<sup>め</sup> よ、慶<sup>よろこ</sup> べ、悲<sup>かな</sup> しむ者<sup>もの</sup> の喜<sup>よろこ</sup> び、颶<sup>ぐ</sup> 風<sup>ふう</sup> に遭<sup>あ</sup> ふ者<sup>もの</sup> の停<sup>てい</sup> 泊<sup>ぼく</sup> よ、慶<sup>よろこ</sup> べ、凡<sup>たゞ</sup> そ危難<sup>あ</sup> に在<sup>あ</sup> る者<sup>もの</sup> の扶<sup>ふ</sup> 助<sup>じよ</sup> 者<sup>しや</sup> よ、慶<sup>よろこ</sup> べ。童<sup>どう</sup> 貞<sup>てい</sup> 女<sup>じよ</sup> ・純<sup>じゆん</sup> 潔<sup>けつ</sup> なる女<sup>じよ</sup> 宰<sup>けつ</sup> よ、我をも悉<sup>き</sup> くの苦難<sup>くなん</sup> より護<sup>まも</sup> り給<sup>たま</sup> へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

恩<sup>おん</sup> 寵<sup>ちゆう</sup> 來<sup>ら</sup> りて、法<sup>ほ</sup> 律<sup>りつ</sup> の影<sup>かげ</sup> は去<sup>さ</sup> れり、蓋<sup>けだし</sup> 燃<sup>も</sup> ゆる棘<sup>いばら</sup> の焚<sup>や</sup> けざりし如<sup>ごと</sup> く、童<sup>どう</sup> 貞<sup>てい</sup> 女<sup>じよ</sup> は生<sup>う</sup> みし後<sup>のち</sup> も永<sup>なが</sup> く童<sup>どう</sup> 貞<sup>てい</sup> 女<sup>じよ</sup> なり。燄<sup>えん</sup> の柱<sup>ちゆう</sup> の代<sup>しろ</sup> に義<sup>ぎ</sup> の日<sup>ひ</sup> は出<sup>で</sup> てて光<sup>ひかり</sup> る、モイセイ の代<sup>しろ</sup> に我が<sup>わ</sup> 靈<sup>たましい</sup> の救<sup>きゆう</sup> 者<sup>しや</sup> ハ リ ス ト ス は現<sup>あら</sup> れたり。

次ぎて香爐捧持の聖入。「穩なる光」。提綱及び聯禱。

挿句に主日の讃頌、第二調。

ハ リ ス ト ス 救<sup>きゆう</sup> 世<sup>せ</sup> 主<sup>しゆ</sup> よ、爾<sup>なんじ</sup> の復<sup>ふ</sup> 活<sup>かつ</sup> は全<sup>ぜん</sup> 世<sup>せ</sup> 界<sup>かい</sup> を照<sup>てら</sup> せり、爾<sup>なんじ</sup> は己<sup>おのれ</sup> の造<sup>ぞう</sup> 物<sup>ぶつ</sup> を召<sup>め</sup> し給<sup>たま</sup> へり。全<sup>ぜん</sup> 能<sup>のう</sup> の主<sup>しゆ</sup> よ、光<sup>こう</sup> 榮<sup>えい</sup> は爾<sup>なんじ</sup> に歸<sup>き</sup> す。

又讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

救<sup>きゆう</sup> 世<sup>せ</sup> 主<sup>しゆ</sup> よ、爾<sup>なんじ</sup> は木<sup>き</sup> にて木<sup>き</sup> に縁<sup>のろい</sup> る詛<sup>むな</sup> を空<sup>なんじ</sup> しくし、爾<sup>なんじ</sup> の葬<sup>ほう</sup> にて死<sup>し</sup> の權<sup>けん</sup> を滅<sup>ほろ</sup> ぼし、爾<sup>なんじ</sup> の復<sup>ふ</sup> 活<sup>かつ</sup> にて吾<sup>わ</sup> が族<sup>かみ</sup> を照<sup>こう</sup> し給<sup>えい</sup> へり。故<sup>ゆえ</sup> に我<sup>われ</sup> 等<sup>なんじ</sup> 爾<sup>よ</sup> に呼<sup>い</sup> ぶ、生<sup>せい</sup> 命<sup>めい</sup> を施<sup>ほ</sup> すハ リ ス ト ス 我<sup>わ</sup> が神<sup>かみ</sup> よ、光<sup>こう</sup> 榮<sup>えい</sup> は爾<sup>なんじ</sup> に歸<sup>き</sup> す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

第二調 「スポタ」の大晩課 二七一

第二調 「スポタ」の大晩課 二七二

ハ リ ス ト ス よ、爾<sup>なんじ</sup> は十<sup>じゆう</sup> 字<sup>じ</sup> 架<sup>か</sup> に釘<sup>てい</sup> せらるる者<sup>もの</sup> と顯<sup>あら</sup> れて、造<sup>ぞう</sup> 物<sup>ぶつ</sup> の美<sup>うる</sup> しき<sup>わ</sup> を變<sup>へん</sup> 易<sup>えき</sup> せり。惟<sup>ただ</sup> 兵<sup>へい</sup> 卒<sup>そつ</sup> は殘<sup>ざん</sup> 忍<sup>にん</sup> して戈<sup>ご</sup> を以<sup>もつ</sup> て爾<sup>なんじ</sup> の脅<sup>おど</sup> を刺<sup>さ</sup> し、エウレイ 人は爾<sup>なんじ</sup> の權<sup>けん</sup> を知<sup>し</sup> らずして墓<sup>はか</sup> を封<sup>ふう</sup> 印<sup>いん</sup> せんこ<sup>ん</sup> とを求<sup>もと</sup> めたり。慈<sup>じ</sup> 憐<sup>れん</sup> に由<sup>よ</sup> りて葬<sup>ほう</sup> を受<sup>う</sup> け、三<sup>さん</sup> 日<sup>にち</sup> 目<sup>め</sup> に復<sup>ふ</sup> 活<sup>かつ</sup> せし主<sup>しゆ</sup> よ、光<sup>こう</sup> 榮<sup>えい</sup> は爾<sup>なんじ</sup> に歸<sup>き</sup> す。

句、主よ、聖徳は爾の家<sup>いえ</sup> に屬<sup>ぞく</sup> して永<sup>えい</sup> 遠<sup>えん</sup> に至<sup>いた</sup> らん。

生<sup>せい</sup> 命<sup>めい</sup> を施<sup>ほ</sup> すハ リ ス ト ス よ、爾<sup>なんじ</sup> は死<sup>し</sup> に屬<sup>ぞく</sup> する者<sup>もの</sup> の爲<sup>ため</sup> に甘<sup>あま</sup> じて苦<sup>くる</sup> を受<sup>う</sup> けて、有<sup>ゆう</sup> 能<sup>のう</sup> 者<sup>しや</sup> とし<sup>て</sup> 地<sup>じ</sup> 獄<sup>ごく</sup> に降<sup>か</sup> り、彼<sup>か</sup> 處<sup>ちよ</sup> に爾<sup>なんじ</sup> の降<sup>かう</sup> 臨<sup>りん</sup> を待<sup>まち</sup> つ者<sup>もの</sup> を強<sup>つよ</sup> き者<sup>もの</sup> の手<sup>て</sup> より奪<sup>う</sup> びて、地<sup>じ</sup> 獄<sup>ごく</sup> に易<sup>か</sup> へて樂<sup>らく</sup> 園<sup>えん</sup> に住<sup>す</sup> むを賜<sup>たま</sup> へり。故<sup>ゆえ</sup> に爾<sup>なんじ</sup> の三<sup>さん</sup> 日<sup>にち</sup> 目<sup>め</sup> の復<sup>ふ</sup> 活<sup>かつ</sup> を讃<sup>さん</sup> 揚<sup>やう</sup> する我<sup>われ</sup> 等<sup>なんじ</sup> にも諸<sup>しよ</sup> 罪<sup>ざい</sup> の潔<sup>きよ</sup> 淨<sup>じよ</sup> と大<sup>おほ</sup> なる憐<sup>あわれ</sup> とを與<sup>あた</sup> へ給<sup>たま</sup> へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

嗚<sup>あ</sup> 呼<sup>あ</sup> 新<sup>しん</sup> なる奇<sup>き</sup> 跡<sup>せき</sup> 、古<sup>いにし</sup> の悉<sup>こと</sup> くの奇<sup>き</sup> 跡<sup>せき</sup> に勝<sup>まさ</sup> る者<sup>もの</sup> や。誰<sup>だれ</sup> か夫<sup>おつと</sup> なき母<sup>はは</sup> が萬<sup>ばん</sup> 物<sup>ぶつ</sup> を有<sup>たも</sup> つ主<sup>しゆ</sup> を生<sup>う</sup> みて、其<sup>その</sup> 手<sup>て</sup> に抱<sup>いだ</sup> きし知<sup>し</sup> りたる、此<sup>こ</sup> の産<sup>さん</sup> は神<sup>かみ</sup> の旨<sup>むね</sup> なり。至<sup>いた</sup> りて潔<sup>いさ</sup> き者<sup>もの</sup> よ、爾<sup>なんじ</sup> が嬰<sup>おさ</sup> 兒<sup>なご</sup> として己<sup>おのれ</sup> の手<sup>て</sup> に抱<sup>いだ</sup> きし主<sup>しゆ</sup> の前<sup>まへ</sup> に母<sup>はは</sup> の勇<sup>いさ</sup> を以<sup>もつ</sup> て、我<sup>われ</sup> 等<sup>なんじ</sup> を尊<sup>と</sup> む者<sup>もの</sup> の靈<sup>たましい</sup> を憐<sup>あわれ</sup> みて救<sup>すく</sup> はんことを常<sup>つね</sup> に祈<sup>いの</sup> り給<sup>たま</sup> へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

トロバリ  
主日の讃詞、第二調。

死せざる生命よ、爾死に降りし時、神の性の光にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復活せしめし時、天軍皆呼びて曰へり、生命を賜ふ主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

生神女讃詞

生神女よ、爾の奥義は皆智慧に超ゆ、皆至榮なり。貞潔の封ぜられ、童貞の守らるるに、爾は實の母と知られて、眞の神を生み給へり。彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

主日の早課

「主は神なり」に讃詞、「死せざる生命よ」。光榮、今も、「生神女よ、爾の奥義は」。

第一の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第二調。

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて覆ひ、新なる墓に藏めたり。然れども主よ、爾は三日目に復活して、世界に大なる憐を賜へり。  
句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。天使は香料を攜ふる女に墓の側に現れて呼べり、香料は死者に適ふ、ハリストスは朽壤に與らざる者なり、乃籲べ、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり、我等爾を歌ふ、蓋爾の子の十字架にて地獄は滅され、死は殺され、我等殺されし者は興きて生命を得、復古の樂なる樂園を受けたり。故に我等ハリストス吾が神に感謝して、其權能ありて獨大仁慈なるを讚榮す。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第二調。

第二調 主日の早課 二八九

第二調 主日の早課 二九〇

墓の石に封印するを禁ぜずして、爾は復活して、信の石を衆に賜へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。  
爾の門徒の會は攜香女と偕に同心に喜ぶ。我等も彼等と偕に共與の祭を祝ひ、爾の復活を讚榮尊敬して爾に呼ぶ、人を愛する主よ、爾の民に大なる憐を垂れ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり、蓋爾より身を取りし主は地獄を虜にし、アダムを喚び起し、詛を破り、エワを赦し、死を滅し、我等を生かせり。故に我等歌ひて呼ぶ、斯く行ひ給ひしハリストス神は崇め讚めらる、光榮は爾に歸す。

「ネポロチニ」の後に應答歌、第二調。

ハリストス神よ、苦難の後、女等墓に往きて、爾の身に香料を傳らんとせしに、天使等を墓の中に見て驚けり、蓋彼等の言ふを聴けり、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

ステペシナ アンティフォン  
品第詞、第二調。第一倡和詞。毎句復唱す。

救世主よ、我が心の目を天に爾に擧ぐ、爾の光照にて我を救ひ給へ。  
嗚呼吾がハリストスよ、時毎に多く爾に罪を犯せる我等を憐みて、終の前に爾に痛悔する法を與へ給へ。 光榮

せいしん さいせい せい ほどこ ぞうぶつ かつどう かな ちちおよ こ いっせい かみ  
聖神には宰制し、聖を施し、造物を活動せしむること適ふ、父及び子と一性の神なれば  
なり。 **今も、同上。**

### 第二倡和詞

も しゅ われら うち だれ てきた ひとごろし まつと まもる た  
若し主我等の中にあらざば、誰か敵又殺人者より全うし護らるるに堪へん。  
きゅうせいしゅ なんじ ぼく かれら は わた なか けだし わ てき しし ごと われ むか すす  
救世主よ、爾の僕を彼等の齒に付す勿れ、蓋我が敵は獅の如く我に向ひ進む。

### 光榮

せいしん いのち いずみおよ せんえい ぞく けだしかみ そのちから もつ いっさい ぞうぶつ ちち うち こ  
聖神には生命の泉及び尊榮は屬す、蓋神として、其力を以て、一切の造物を父の中に、子  
よ まも  
に因りて守る。 **今も、同上。**

### 第三倡和詞

しゅ たの もの せいざん に あえ てき こうげき よ うご  
主を頼む者は聖山に似たり、敢て敵の攻撃に因りて動かざらん。  
けいけん いのち おく もの おのれ て ふほう の けだし そのしぎょう ため つえ はな  
敬虔に生を送る者は己の手を不法に伸ぶべからず、蓋ハリストスは其嗣業の爲に杖を放  
たず。 **光榮**

第二調 主日の早課 二九一

第二調 主日の早課 二九二

せいしん いっさい ちえ わ いだ これ しと おんちよう く ちめいしや くるしみ よ えいかん  
聖神にて一切の智慧は涌き出さる、是より使徒は恩寵を斟み、致命者は苦に因りて榮冠  
を冠り、預言者は見る。 **今も、同上。**

### 提綱、第二調。

しゅ わ かみ お お なんじ さだ しんぱん おこな たま ばんみんなんじ めぐ しゅ わ かみ われなんじ  
主我が神よ、起きて、爾が定めし審判を行ひ給へ、萬民爾を環らん。句、主我が神よ、我爾  
を頼む、我を救ひ給へ。

「凡そ呼吸ある者は」。主日の早課福音經。

「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。其他常例の如し。

### 主日の規程、第二調。

### 第一歌頌

イルモス、ま った そ な ちから わかし ぜんぐん ふかみ し じんたい と ことば さんえい  
全く備はれる力は昔ファラオンの全軍を深水に敷き、人體を取りし言、讚榮  
せらるる主は萬の悪を致す罪を滅し給へり、彼嚴に光榮を顯したればなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

し ぜん しゅ よ きみ われら なんじ いましめ そむ ふくじゅう もの なんじ じゅうじか ていざい  
至善なる主よ世の君、我等が爾の誠に背きて服従せし者は爾の十字架にて定罪せら  
れたり、蓋死に屬する者と爲して爾に觸れて、爾の權能に由りて權を失ひ、弱き者と顯  
れたり。

なんじ じんるい しょうざいしゅおよ ふきゅう いのち かしら よ きた けだしなんじ ふかつ もつ し なわめ  
爾は人類の贖罪主及び不朽の生命の首として世に來れり、蓋爾の復活を以て死の縲綬  
を斷ち給へり。我等皆之を讚榮す、爾嚴に光榮を顯したればなり。

### 生神女讚詞

いさぎよ えいでいどうじょ なんじ み み いっさい ぞうぶつ いた うえ もの あらわ  
潔き永貞童女よ爾は見ゆると見えざる一切の造物より至りて上なる者と顯れたり、  
ぞうせいしゅ う そのなんじ たいない み と ほつ ごと くれ いさみ もつ わ  
造成主を生みたればなり、其爾の胎内に身を取らんと欲せしが如し。彼に勇敢を以て我  
が靈を救はんことを祈り給へ。

又十字架復活の規程、其冠詞は、生命を施す言に讚美を歌ふ。

### 第一歌頌 同調

イルモス、えら かつ ふ つね うみ みち あし ぬ とお  
選ばれたるイズライリは曾て履まれぬ、常ならぬ、海的路を足を濡らさずして過  
りて呼べり、主に謳はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスよ、なんじ にくたい くるしみ よ よわ もの ちから おちい もの おこし し もの ふきゅう  
爾は肉體の苦に由りて弱き者の能力、陥りし者の提起、死せし者の不朽

と爲れり、光榮を顯したればなり。  
神造成主及び更新者は殺されて、陥りし像に慈憐を施し、壞られし者を興し、衆を生かし給へり、彼光榮を顯したればなり。

又至聖なる生神女の規程、其冠詞は、生命を施す少女に讚美を歌ふ。

第一歌頌 同調、同イルモス。

第二調 主日の早課 二九三

第二調 主日の早課 二九四

潔き者よ、昔靈現の梯及奇妙に啓けたる海的路は爾の産を顯せり。我等皆之を歌ふ、其光榮顯れたればなり。

純潔なる者よ、至上者の力、三者の一位、神の智慧は爾より身を取りて、人人に近き給へり、其光榮顯れたればなり。

潔き者よ、義の日は爾の閉されたる胎の過られぬ門を過りて、世界に輝けり、其光榮顯れたればなり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合の如く華さけり、我が心は此に縁りて固められたり。

造物は爾の苦に因りて變じたり、爾神聖なる指磨を以て一切を基づけたる主が卑しき形に於て不法者より辱しめらるるを見たればなり。

ハリストスよ、爾は己の像に形りて、爾の手を以て我を塵より造り、復罪の爲に地の塵に還されし者を地獄に下りて、己と偕に復活せしめ給へり。

生神女讚詞

至淨なる者よ、爾の産に因りて天使の品位は驚き、人人の心は懼れたり、故に我等信を以て爾を生神女と尊む。

又

イルモス、ハリストスよ、爾の權能に因りて強き者の弓は折られ、弱き者は力を帯びたり。

萬有より上なるハリストスは肉體の苦を以て天使等の性より少しく遜りたり。

ハリストスよ、爾は死して罪犯者と偕に算へられ、復活して女等に光榮の榮冠を以て耀ける者と顯れたり。

又 同イルモス

童貞女よ、時の造成者にして凡の時に超ゆる者は甘じて爾に藉りて嬰兒と爲りたり。我等は天より宏き腹、アダムに喜びて天に居らしむる者を歌頌せん。

第四歌頌

イルモス、童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

我が神、審判を諸民に行ふ主宰よ、爾は聲を出さずして、審判せらるる者として

第二調 主日の早課 二九五

第二調 主日の早課 二九六

審判座の前に立つ。ハリストスよ、爾は此の苦にて世界の爲に救を立て給へり。

ハリストスよ、爾の苦に因りて敵には武器悉く盡き、爾が地獄に下るに因りて仇の城邑は毀たれ、苦しむる者の狂暴は壊られたり。

生神女讃詞

女宰生神女よ、我等衆信者は爾を救の湊及び堅固なる城として知る、爾の祈祷に因りて我等の靈を危難より脱れしめ給へばなり。

又

イルモス、人を愛する主よ、我爾の光榮なる攝理を聞いて爾の悟り難き能力を讚榮せり。  
ハリストスよ、病なく爾を生みし童貞女は爾が木に釘せられたるを見て、母として病を忍びたり。  
死は勝たれ、死者は地獄の門を壊ちたり、蓋衆を呑む者は破られて、天性に超ゆる諸恩は我に賜はりたり。

又 同イルモス

視よ、主の家の神聖なる山は最高く擧りたり、是れ神の母、天軍に超ゆる者なり。  
童貞女よ爾は獨神聖なる召に勝ふる者と爲りて、天性に超えて造物を掌る主を生み給へり。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依りて、無智の闇より光の原なる爾の父に就くを得たればなり。  
主宰ハリストスよ、爾は身にて甘じて松と黄楊樹と柏香木とに擧げられしに因りて、リワンの柏香木を摧く如く、諸民の驕を壊り給へり。  
ハリストスよ、彼等爾を氣息なき死者として最深き坎に置きたれども、爾は傷つけられた、爾の傷に因りて墓に寝ぬる遺れられたる死者を爾と偕に復活せしめ給へり。

生神女讃詞

潔き童貞女よ爾を頼む者を諸敵の攻撃より護りて、之に平安を賜はんことを爾の子及び主に祈り給へ。

又

イルモス、イサイヤに蕪炭として現れし日は童貞女の腹より黒暗に迷ひし者に輝きて、神を知る知識の光照を賜ふ。

第二調 主日の早課 二九七

第二調 主日の早課 二九八

第一のアダムは齋を辭みて、死を致す木の果を食ふ、第二のアダムは木に釘せられて、其罪を滅す。

無形の神性にて苦に與らざるハリストスよ、爾は人の性にて苦及び死に與りて、殺されし者を不朽の者と爲して、地獄の深處より復活せしめ給へり。

又 同イルモス

雲よ、樂の甘味を地に居る者に注げ、蓋世の先より在す神は童貞女より身を取りて、嬰兒として我等に賜はりたり。  
末の時に童貞女より種なく身を取りし至上者は我が生命我が肉體に光を輝かして、罪に由る衰弱を除き給へり。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

義者は犯罪者の如く定罪せられ、犯罪者と偕に木に釘せられて、己の血に由りて罪過ある者に赦を賜ふ。

昔一人第一のアダムに由りて死は世に入り、又一人神の子に由りて復活は顕れたり。

### 生神女讃詞

童貞女よ、爾は夫を識らずして生み、又永遠に童貞女に止まりて、爾の子及び神の眞の神性の印象を顯す。

又

イルモス、主宰よ、傷める靈より祈祷の言の聲を聞きて、我を諸難より脱れしめ給へ、爾は獨我等の救の縁由なればなり。

爾は生命の樹を罪に陥りし者より護らん爲にヘルウィムを立てたり、然れども爾を見て門は啓かれたり、爾盜賊を樂園に導きて現れたればなり。

一人の死に藉りて地獄は破られて空しくなれり、其聚めたる多くの富は獨ハリストス我等衆の爲に之を盡し給へり。

### 又 同イルモス

潔き女宰よ、罪に服役する人の性は爾に縁りて自由を獲たり、蓋爾の子は羔の如く衆の爲に屠られたり。

我等皆爾眞の神の母に呼ぶ、怒に觸れたる諸僕を援け給へ、爾濁子の前に勇敢を有てばなり。

### 小讃詞、第二調。

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物

第二調 主日の早課 二九九

第二調 主日の早課 三〇〇

は見て爾と偕に喜び、アダムは共に楽しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌ふ。

### 同讃詞

救世主よ、爾は味まされし者の光、爾は衆の復活、人人の生命なり。言よ、爾は死の權を滅し地獄の門を破りて、衆を己と偕に復活せしめたり。人を愛する主よ、死者は奇蹟を見て驚き、萬物は爾の復活の爲に喜ぶ。故に我等衆も爾の寛容を讃榮歌頌し、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌ふ。

### 第七歌頌

イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讃め歌はるるハリストスは敬虔の少者に屬神の露を降し給へり。

主宰よ、爾は慈憐に由りて人の死に苦しめらるるを見るに忍びずして、人と爲り、來りて、爾の血を以て之を救ひ給へり、爾は我が先祖の讃美讃榮せらるる神なればなり。

ハリストスよ、地獄の門衛は爾が復讐の衣を衣たるを見て懼れたり、蓋爾主宰は狂暴の殘虐者たる奴隷を殺さん爲に來り給へり、爾は我が先祖の讃美讃榮せらるる神なればなり。

### 生神女讃詞

無玷なる童貞女、聘女ならぬ母よ、我等爾を獨變易なき神を生みし者として、聖者の中に至りて聖なる者なりと識る、蓋爾は神聖なる爾の産にて衆信者に不朽を流し給へり。

又

イルモス、昔少者は智慧深き辯舌者と現れて、至りて敬虔なる靈より口を以て祝讃して歌へり、先祖及び我等の至聖なる神よ、爾は崇め讃めらる。  
昔不順はエデムに於て原祖を定罪せり、然れども至聖にして讃美たる先祖の神は甘じて定罪せらるるを以て誠を犯しし者の罪を釋き給へり。  
至聖にして讃美たる先祖の神よ、爾は殺人者の猜忌に因りてエデムに於て其舌にて傷つけられし者を救へり、甘じて得たる傷を爾は甘じて受けたる苦にて醫し給へり。

生神女讃詞

至聖にして讃美たる先祖の神よ、爾は神性の光明にて暗き地獄を照して、我死の蔭を行く者を光に召し給へり。

又 同イルモス

イアコフは人體を取り給ふ神を夜間朦朧の中に見たり、爾に由りて至聖にして讃美たる先祖の神は明に彼を歌ふ者に現れ給へり。

第二調 主日の早課 三〇一

第二調 主日の早課 三〇二

潔き者よ、至聖にして讃美たる先祖の神、爾に由りて甘じて人人に合せられし主は、言ひ難く彼等の罪を卸さんとする前兆として、イアコフと角力を爲し給ふ。  
爾童貞女の子、至聖なる三者の一位を疑なき信を以て傳へず、舌を以て至聖にして讃美たる先祖の神よと呼ばざる人は厭はるべし。

第八歌頌

イルモス、昔ワロイロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。  
ハリストスよ、天使の品位は爾の肉體の衣が爾の血にて赤みたるを見て慄き、爾の大なる寛忍に驚きて呼べり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。  
慈憐なるハリストスよ、爾は己の復活を以て我の死に屬する性に不死を衣給へり。故に選を蒙りたる民は感謝して爾を讃め歌ひ、楽しみて爾に呼ぶ、實に死は勝に吞まれたり。

生神女讃詞

至淨なる神の母よ、爾は父に別れざる者を種なく胎内に孕みて、言ひ難く生み給へり。故に我等は爾を我衆の救と認む。

又

イルモス、三重に福たる少者は金の像を顧みずして、變易なき活ける神の像を見て、焰の中に歌へり、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。  
慈憐豊なる仁愛の主よ、爾は十字架に釘せらるる者と見られ、甘じて葬られ、三日目に復活し、衆人を救ひて、信を以て歌はしむ、萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。  
神の言ハリストスよ、爾は造りし者を朽壞より救はん爲に地獄に降り、爾の神聖なる力にて之を不朽の者と爲し、爾の永在なる光榮に與る者と爲して呼ばしむ、萬物はハリストスを歌ひて、世世に讃め揚ぐべし。

又 同イルモス

仁慈能力の比ぶべきなき主は爾に由りて地上に見られ、人と偕に在せり。我等信者皆彼を歌ひて呼ぶ、造を受けし萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。

われら なんじいさぎよ もの じつ しょうしんじよ つた さんえい けだしなんじ さんしゃ いち い み と もの う  
我等は爾 潔き者を實に生神女と傳へて讚榮す、蓋 爾は三者の一位、身を取りし者を生  
み給へり。我等皆彼に父及び聖神と偕に歌ふ、萬物は主を歌ひて、萬世に讃め揚ぐべし。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルウィムより尊く」。

第二調 主日の早課 三〇三

第二調 主日の早課 三〇四

### 第九歌頌

イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、味まされし者を明かし、散らされし者を集め給へり。故に我等讚美たる生神女を崇め歌ふ。

ハリストス救世主よ、爾の至淨なる十字架の三重に尊貴なる木は地堂に於けるが如く觸體の處に植えられ、神聖なる泉よりするが如く爾の脅の神聖なる血と水とに濕されて、我等の爲に生命を生じたり。

全能者よ、爾は十字架に上げられて、有權者を墜し、下に堅固なる地獄に伏したる人の性を擧げて、父の寶座に坐せしめたり。我等父と偕に爾還來らんとする主に伏拜して崇め歌ふ。

### 聖三者讚詞

我等信者は三位なる惟一者、一性の三者を眞正に歌ひて、分れざる至聖なる性體、三妙の暮れざる日、獨一永在にして、光を我等に輝かしし神を讚榮す。

又 イルモス、「食に縁りて甚しく朽壤に陥りし」。

ハリストスよ、爾は觸體の處に、定罪せられし者の間に、羔の如く十字架に上げられ、戈にて脅を刺されて、仁慈なる主として、塵に屬する我等、信を以て爾の神聖なる復活を尊む者に生命を賜へり。

我等衆信者は己の死を以て死の權を空しくせし神に伏拜せん、古世よりの死者を己と偕に復活せしめて、衆に生命と復活とを與へ給へばなり。

又

イルモス、神の言、童貞女の子、諸神の神、諸聖の至聖者たる主よ、爾は全く冀望、全く甘味なり。故に我等皆爾及び爾を生みし者を崇め讚む。

潔き者よ、爾の胎内に於て能力の杖たる神の言は朽壤の性に與へられて、此の躓きて地獄に陥りし者を復活せしめたり、故に我等爾純潔なる者を生神女として崇め讚む。主宰よ、慈憐を以て我等の爲に祈る爾の母を納れて、衆を爾の仁慈に充たしめ給へ、我等皆爾を恩主として崇め讚めん爲なり。

カトワシヤ エクサポステイライ  
共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。早課の 差遣詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讚頌、第二調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。主よ、凡そ呼吸ある者及び悉くの造物は爾を讚榮す、蓋 爾は十字架にて死を空しくせり、人人に爾の死よりの復活を顯さん爲なり、獨人を慈む主なればなり。

第二調 主日の早課 三〇五

第二調 主日の早課 三〇六

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

イウデヤの言ふべし、如何ぞ王を守る兵卒は之を失ひたる、何ぞ石は生命の石を守らざりし。或は葬られし者を與ふべし、或は復活せし者に伏拜して、我等と偕に云ふべし、吾が救世主よ、光榮は爾の大なる恵に歸す、光榮は爾に歸す。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至 嚴 なるに依りて彼を讃め揚げよ。  
人人よ、喜び樂しめよ、墓の石に坐する天使は我等に福音して云へり、ハリストス世界の救主は死より復活して、萬有に馨しき香氣を満て給へり。人人よ、喜び樂しめよ。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。  
主よ、天使は爾が未だ孕まれざる先に、恩寵を蒙れる者に慶べよと報じ、天使は又爾の復活の時に、爾が光榮なる墓の石を移せり。彼は悲に代へて樂の徴を示し、此は死に代へて我等に生を施す主宰を傳へたり。故に我等爾に呼ぶ、萬有の恩者なる主よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌、アナトリイの作、第二調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。  
女等は涙と共に香料を爾の墓に注ぎしに、彼等の口は、ハリストス復活せりと言ふ時、歡喜に満てられたり。

句、和聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

諸族諸民はハリストス我等の神、甘じて我等の爲に十字架を忍びて、地獄に三日在りし主を讃め揚げて、其死よりの復活、世界の四極を照しし者に伏拜すべし。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。  
ハリストスよ、爾は望みし如く、十字架に釘せられ、葬られたり、神及び主宰として、死を滅し、光榮の中に復活して、世界に永遠の生命と大なる憐れとを賜へり。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。  
嗚呼石に封印せし不法者は實に我等に更に多くの奇跡を見るを得しめたり。番兵は今彼が墓より出でたるを知れるに、之に謂ふ、告ぐべし、我等が寝ねたる時、其門徒來りて、彼を竊めりと。誰か死者、殊に裸體なる者を竊まん、彼親ら神として、己の權を以て復活して、墓の中に其斂葬の衣を遺せり。イウデヤ人よ、來りて、觀よ、死

第二調 主日の早課 三〇七

第二調 主日の早課 三〇八

を滅し、人類に永遠の生命と大なる憐れとを賜ひし者は如何にして封印を破らざりし。

光榮、早課の福音の讚頌。今も、生神女讚詞、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり。」

大詠頌。次ぎて復活の讚詞。

主よ爾は墓より復活して、地獄の鎖を壊り、死の定罪を滅し、衆人を敵の網より救へり。獨大慈憐なる者よ、爾は使徒に顯れて、彼等を傳教に遣し、彼等に依りて爾の平安を世界に賜へり。



聖體禮儀には、眞福詞、第二調。

我等盜賊の聲を爾に奉りて祈る、救世主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。  
人を愛する主よ、爾が我等の爲に受け給ひし十字架を爾に奉りて、我が罪過の赦を求

む。

句、<sup>わへい おこな もの さいわい</sup>和平を行ふ者は福なり、<sup>かれら かみ こ な</sup>彼等神の子と名づけられんとすればなり。  
人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>爾<sup>なんじ</sup>の葬<sup>ほうむり</sup>と復活<sup>ふっかつ</sup>とに伏拜<sup>ふくはい</sup>す、爾<sup>なんじ</sup>は此等<sup>これら</sup>を以て世界<sup>もつ</sup>を朽壤<sup>せかい</sup>より脱<sup>きゅうがい</sup>れしめ給<sup>たま</sup>へり。

句、<sup>ぎ ため きんちく</sup>義の爲に窘逐せらるる者は福なり、<sup>てんこく かれら もの</sup>天國は彼等の有なればなり。  
主<sup>しゅ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>の死<sup>し</sup>にて死<sup>し</sup>は吞<sup>の</sup>まれたり、救世主<sup>きゅうせいしゅ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>は復活<sup>ふっかつ</sup>を以て世界<sup>もつ</sup>を救<sup>すく</sup>ひ給<sup>たま</sup>へり。

句、<sup>ひと われ ため なんじら のし きんちく なんじら こと いつわ もろもろ あ ことば い とき</sup>人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、  
爾等<sup>なんじら</sup>福<sup>さいわい</sup>なり。

爾<sup>なんじ</sup>は墓<sup>はか</sup>より復活<sup>ふっかつ</sup>して、攜香女<sup>けいこうじよ</sup>に遇<sup>あ</sup>ひ、彼等<sup>かれら</sup>に爾<sup>なんじ</sup>の復活<sup>ふっかつ</sup>を使徒<sup>しと</sup>に傳<sup>つた</sup>へんことを命<sup>めい</sup>じ給<sup>たま</sup>へり。

句、<sup>よろこ たの てん なんじら むくいおお</sup>喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

ハリストスよ、<sup>くらやみ ねむ もの なんじ じごく ふかみ かがや ひかり み ふっかつ</sup>黑暗に眠る者は爾地獄の深處に輝きし光を見て復活せり。

光榮

<sup>われら みなしん もつ ちち きんえい こ ふくはい せいしん かしょう</sup>我等皆信を以て父を讚榮し、子に伏拜し、聖神を歌頌せん。

今も、生神女讚詞。

<sup>ひ さま ほうざ よろこ よめ よめ よろこ かみ ひとびと ため う どうていじよ よろこ</sup>火の状の寶座よ、慶べ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ、神を人人の爲に生みし童貞女よ、慶べ。

ボロキメン

提綱。第二調。

第二調 主日の聖體禮儀 三〇九

第二調 主日の晩課 三一〇

<sup>しゅ わ ちから わ うた かれ わ すくい</sup>主は我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり。

句、<sup>しゅ きび われ ばつ われ し わた</sup>主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき。

「<sup>ねが しゅ うれい ひ おい なんじ き</sup>ア Ril イヤ」、願はくは主は憂の日に於て爾に聴き、<sup>かみ な なんじ ふせ まも</sup>イアコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。

句、<sup>しゅ おう すく また われら なんじ よ とき われら き たま</sup>主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時我等に聴き給へ。

~~~~~